

特42

986

庫録

荒川武勇傳

上卷



香澤寺板





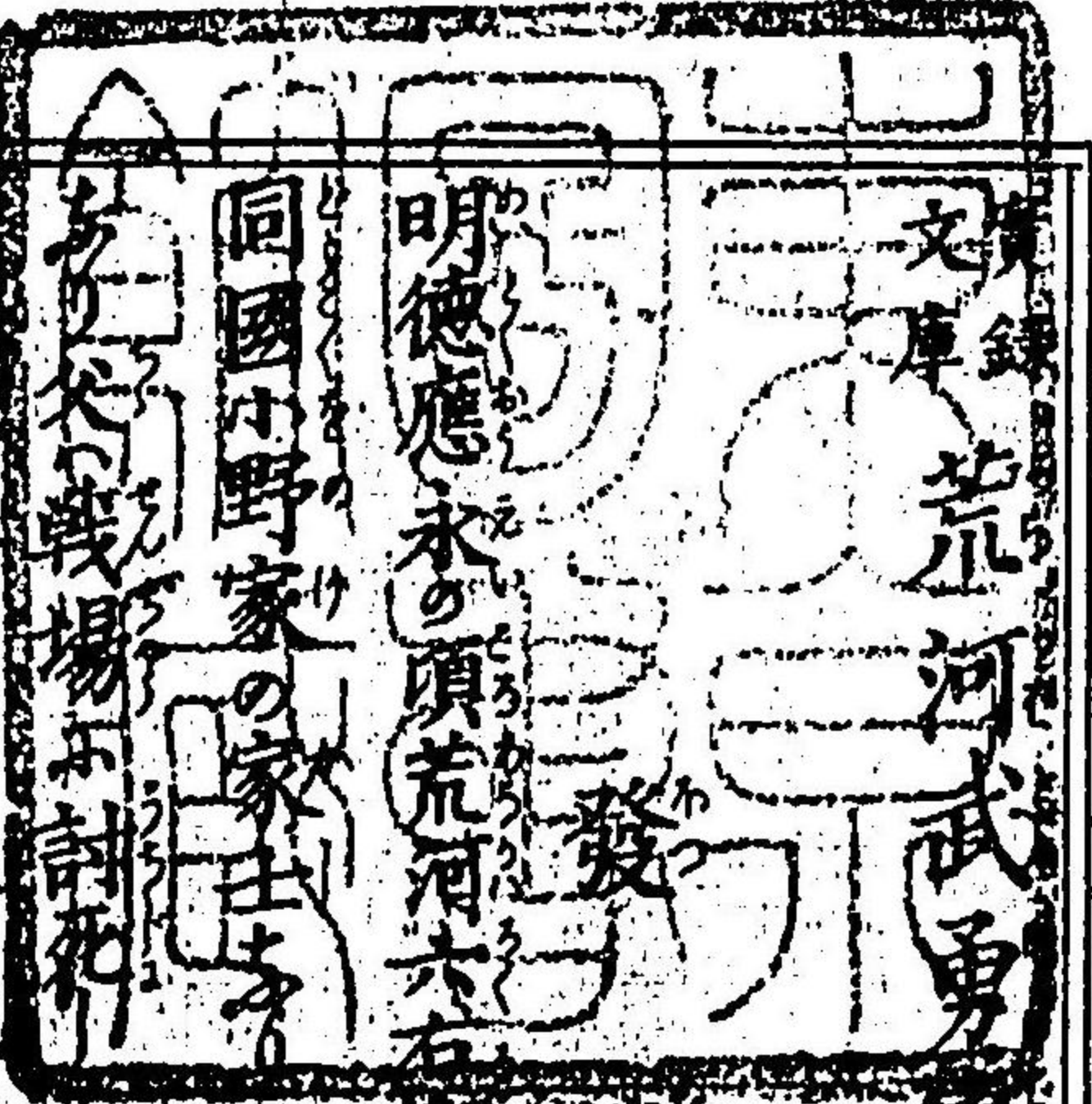
喜陽堂叢書

言野  
事見實  
紙少  
委曲録

喜陽堂叢書

文庫 荒河武勇傳上の巻

東京 春風亭香雨編



明德應永の頃荒河六右衛門光利といへる勇士あり出羽山形の産なりて父を玄蕃光基といひ  
同國小野家の家主あり山形在の百姓某の娘と密に契り一男子を生しむこれ六右衛門  
光利の戦場討死す餘義あり民間に成長りか性質勇氣逞しく筋骨健にして百

姓を嫌ひ武術の志深く劍槍とも不長師をえらみてをさく其纏奥を究め大青雲の志  
を起し諸國武者修行ふ出立けるが此時生年三十四也身丈六尺一寸面白く顔色溫柔  
あり既にして越後の國新潟に至り海邊の酒店に休み北海の風景を眺る折らこの邊の  
劍術家にて安達藩龍軒といへる者自誇る白痴者あねば無禮の振舞をるのみ遂に  
荒河が腰の物をまたぎ又亭主を罵り美の需を抛ち荒河の膝を汚きなり光利も堪へ  
かねて咎めしより口論となり遂に真劍の勝負不及をんと所の司不届出で濱辺に於て勝負

喜陽堂叢書



を決する小光利が武藝をままよりけん合せつ六右衛門がヤアと聲うけ蟠龍軒が右の肩先  
 一寸ばかり切込だりこい無念ありと安達は踏込み切らんともるをかい潜り腰のつづみを切下る  
 不安達へ堪らむ尻居ふ倒れ其休息絶ふたりこを見物の人々へほめどよめく聲へさあがら潮  
 の湧か如しこの時見分の役人倉本惣左衛門その早業を感し懇ふ止むれども荒河は袖では  
 らふて新瀉を去り道程三里をかりも至るふもや日も暮んとする小宿もあけられ尚一里は  
 かりも急ぐ程に川尻村といふ家来れりこいへ家居も少からむ其中小長屋門を構へ入口  
 小大木の柳二本植たる家なるふを案内をまよし一夜の宿を乞ひけるふ王與左衛門を意  
 よううけがひ一宿許し懇ふ饗けける侍て光利へ此家の庭を廻り見るふ麦打場のこな  
 たふて廿戈むかりの壯者大裸ぬぎふて一心不乱小棒をつらひ居たり荒河は是を見て思  
 むやと喝采をなれば彼壯者より返り何者あるぞ我誓古を見て叨み聲を蒐むといふ無礼な  
 りと咎ねば與左衛門へ走り出で俸過言をまべからむ今宵宿り玉ひし賓客にて武術の  
 達人ふておももふりといふに壯者打驚き一札をふまふ荒河も姓名をあのり殷勤に挨拶

抄ふまふ小與左衛門のいへるやう此者ハ翁が子熊太郎と申今年十九才あり且て武藝  
 を好める故武者修行の過りせ玉ふ時留めて指南を受させあり先生にも御教示下さる  
 父子の悦此上か」と聞て荒河いへるやうそい最易き御望あり然し是迄の師い何人ありや熊太郎  
 答へ新瀉の蟠龍軒と申を浪人の門弟よて棒に三笠流ありといへるふ荒河は打驚き安達を師  
 とせられかと思案の体よ父與左衛門安達氏とい御知己よけ彼人腹黒くて門弟某の讒を  
 信ト近頃破門せられたりといふ荒河備障りありやう今日件の安達と真剣の勝負  
 とふし一命を断たりと物語るふ父子に舌を巻いて驚き感し安達は破門の師其死に自業自得ふれ  
 先生を恨る義更ふふりとして希ふと深切多れば其意不愛て師弟の約をかめ此川尻ふ三年の春秋  
 を暮熊太郎を教導ふまふ熊太郎は刀槍の二術出藍の妙慶を得たり侍て荒河は川尻村を拜  
 別れて目を重て越前國戌山の城下をき山ふさうる小城王斯波修理太夫義種獸狩を催さる  
 こより怪我ふとゆうて便ふりと里人のこもるふも構いむ找と行く侍る所へ向より老猪手負と見  
 えて荒河は六右衛門を目懸さんふ馳来るを荒河用意の檜棒よて猪の鼻づらを打て互半死



半生ふたなる所を斯波義種朝臣遙く見玉ひ驚き讚め近士恩田内蔵助を遣し姓名を問ひ玉ふ荒河の六右衛門光利と申し武術を以て諸国を經歴仕ると答るふ内蔵助是を修理大夫に言上を九御對面有りて荒河の人品骨柄温和の處を愛させ仕官を薦めらるふ光利も兼て義種朝臣の名將ふるを知りものうら速く取引ふし大馬の勞を尽さんと答ふ則新地二百石の墨附を與へられ六右衛門の改め主水とふのるべりとて身近く召仕られ且道場を開きし物頭笠原黒兵衛が男子十太郎門弟とふる夫より日々一家中贄を贈り入門し教を受る者雲霞の如し○荒河主水世也ふ至り未妻の向らざればとて關陣大夫と云浪人笠原黒兵衛の婿娘ふて音といるを媒て婚姻を取



結せざるふ夫婦の中睦く二人の男子出生を兄を城の助といひ弟を圓次郎と号ふ圓次郎は勢大く逞くて三戈の時普通の嬰兒の五戈計小見一たり茲に又明德三年梅和田の殘党起立き斯波修理大夫討手の大将にて攝津國玉造とて大合戦有りし荒河主水の第一番の功名を顕し義種朝臣の自筆感状を賜りたり然るは武將義満公義種を召され玉造の戦功を賞せられ其賞として初櫻といふ茶入を賜りぬ義種氣早の大將とて常々義満の賞罰不疎まを淺き思われ怒の向より次の間不逞き聲を投付世に靜謐と云ふも何れも此器我不用すといふ言り館不敗られが此事義満公の耳入り大に怒らせ玉ひ義種の所領高七十万石の半地を召上られ豊後國へ移されし斯



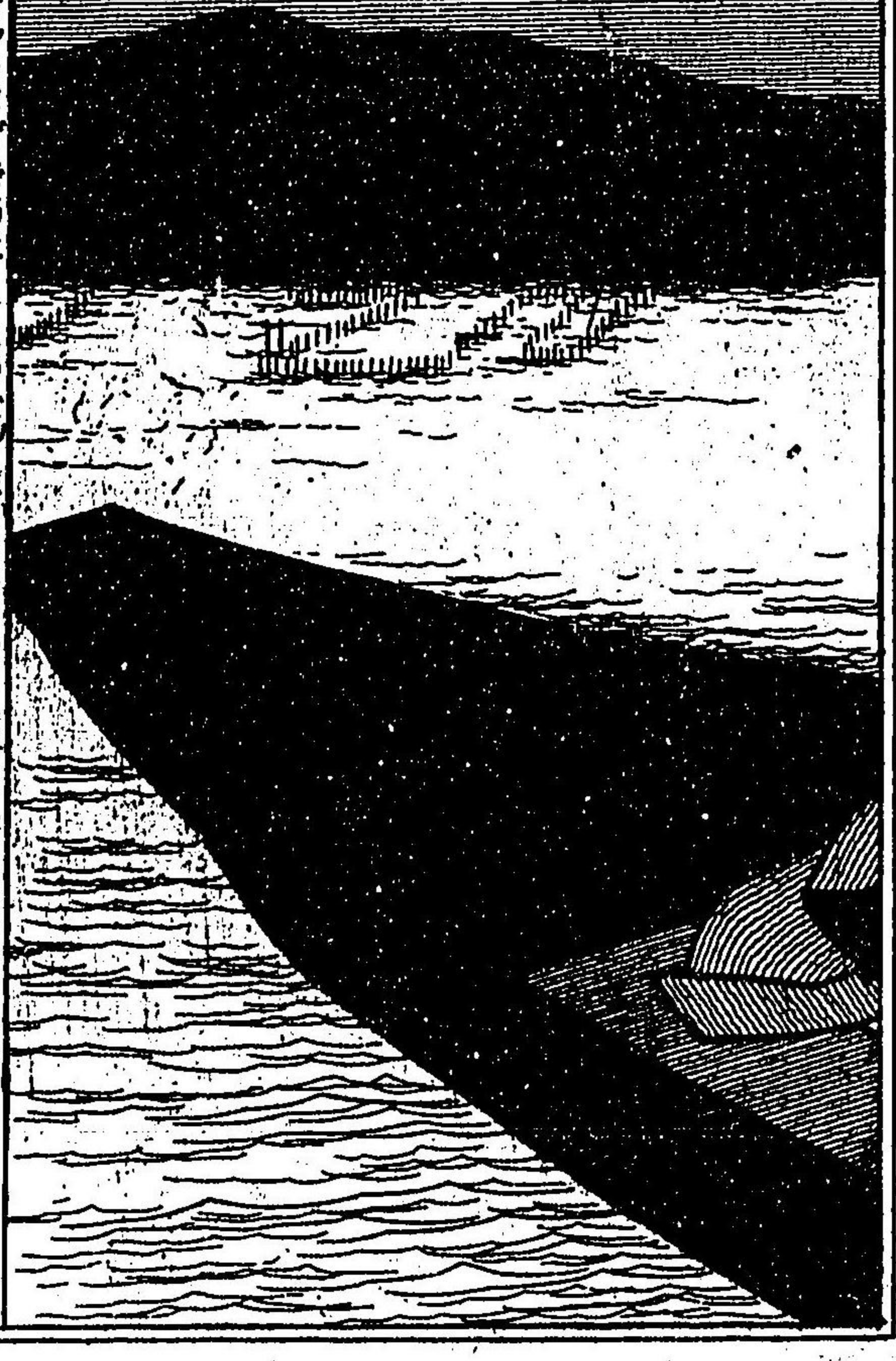


波家も詮方新地抱の者共(水)の暇を玉ひら荒河主水も浪人となり攝州尼崎の知  
 己を便り家内も引移り刀槍の指南を中ぬ或時主水近江の湖中渡船の折ら相學ふ長  
 たる翁おひひが主水を相貴殿の相誠み英傑あれ惜いよ横死の難有り子息二人の中一  
 人の出家ふまをまべと云々を主水大信ト大進ト云學識凡あらゆる老僧を頼り次男圓次郎  
 の師と仰ぎるふ圓次郎ハ兄勝りて  
 剛勇の性質あれども父の意小背りや  
 頭を刺り衣を染め大秀と呼れ師に  
 属て九州下りぬ茲ふ美作高田の城  
 主山名中務大輔義清朝臣京都参  
 勤の旅中此尼崎を通行ゆるふ乗か  
 一の名馬みて速といるが何ふ驚きより  
 らん手綱を切て市中を荒廻ると主



波家も詮方新地抱の者共(水)の暇を玉ひら荒河主水も浪人となり攝州尼崎の知  
 己を便り家内も引移り刀槍の指南を中ぬ或時主水近江の湖中渡船の折ら相學ふ長  
 たる翁おひひが主水を相貴殿の相誠み英傑あれ惜いよ横死の難有り子息二人の中一  
 人の出家ふまをまべと云々を主水大信ト大進ト云學識凡あらゆる老僧を頼り次男圓次郎  
 の師と仰ぎるふ圓次郎ハ兄勝りて  
 剛勇の性質あれども父の意小背りや  
 頭を刺り衣を染め大秀と呼れ師に  
 属て九州下りぬ茲ふ美作高田の城  
 主山名中務大輔義清朝臣京都参  
 勤の旅中此尼崎を通行ゆるふ乗か  
 一の名馬みて速といるが何ふ驚きより  
 らん手綱を切て市中を荒廻ると主

水と此所(来)る荒飛ぶ馬と難  
 ふくおさ(ひ)らりと飛乗二たひ三とい  
 輪乗をふ弱り所を馬役の者引  
 渡せが義清朝臣の感ト玉ひ象  
 川舎人を使者として酒肴を賜へり  
 先年玉造ふての戦功ある荒河主水  
 の事ふれ召抱んと三君ふ仕ぬ荒河  
 を解薦め終入客分の名義みて抱一



られ祿三百石と仕度金百兩を賜り京都五條西の洞院より上邸ふ長屋を賜り一家中一槍  
 の指南をよま下とより同家中み劍術へ直心流槍へ種田流を指南をよ三宅格左衛門と云  
 者何く火術をも得れども妒疑深くして心直くを門弟も少くねと荒河が抱へられてより人  
 柄といひ手並といひ雲泥の違ひられ彼を疎之此を親み道場いつとも淋しく寂たれ格左



衛門(澤)憤胸(つ)か(堪)難(か)り(小)當家(の)嘉(例)と(て)毎(年)正(月)十(日)具(足)開(き)て(吸)物(を)賜(たま)ひ(力)士(會)と(も)一(ふ)其(日)酒(も)巡(り)一(頃)松(田)逸(作)と(し)よ(も)の(鉄)砲(十)挺(を)毛(氈)包(み)基(盤)の(せ)是(を)何(れ)玉(ふ)方(に)當(家)第(一)の(強)力(を)多(り)と(呼)び(よ)み(格)左(衛)門(へ)找(し)出(か)の(基)盤(を)兩(手)に(抱)み(座)を(立)書(院)の(四)度(ま)で(つ)き(五)ツ(め)腕(よ)り(既)に(取)落(さ)し(と)ま(る)と(壯)者(立)下(り)助(て)下(さ)せ(せ)り(一)坐(の)もの(これ)を(讚)め(け)る(を)格(左)衛(門)に(得)たり(顔)て(扣)たり(然)る(小)舍(人)の(主)水(は)是(非)と(勸)る(小)今(は)辭(を)る(も)不(與)ふ(ら)ん(と)荒(河)の(基)盤(若)の(隅)を(相)み(同)ト(柱)を(四)五(度)も(つ)き(故)の(所)持(故)も(不)顔(色)変(ら)ざ(る)小(威)人(舌)を(卷)き(怪)力(を)り(と)與(言)ふ(小)格(左)衛(門)に(益)主(水)を(恨)む(心)の(増)長(何)と(ぞ)荒(河)を(亡)者



衛門(澤)憤胸(つ)か(堪)難(か)り(小)當家(の)嘉(例)と(て)毎(年)正(月)十(日)具(足)開(き)て(吸)物(を)賜(たま)ひ(力)士(會)と(も)一(ふ)其(日)酒(も)巡(り)一(頃)松(田)逸(作)と(し)よ(も)の(鉄)砲(十)挺(を)毛(氈)包(み)基(盤)の(せ)是(を)何(れ)玉(ふ)方(に)當(家)第(一)の(強)力(を)多(り)と(呼)び(よ)み(格)左(衛)門(へ)找(し)出(か)の(基)盤(を)兩(手)に(抱)み(座)を(立)書(院)の(四)度(ま)で(つ)き(五)ツ(め)腕(よ)り(既)に(取)落(さ)し(と)ま(る)と(壯)者(立)下(り)助(て)下(さ)せ(せ)り(一)坐(の)もの(これ)を(讚)め(け)る(を)格(左)衛(門)に(得)たり(顔)て(扣)たり(然)る(小)舍(人)の(主)水(は)是(非)と(勸)る(小)今(は)辭(を)る(も)不(與)ふ(ら)ん(と)荒(河)の(基)盤(若)の(隅)を(相)み(同)ト(柱)を(四)五(度)も(つ)き(故)の(所)持(故)も(不)顔(色)変(ら)ざ(る)小(威)人(舌)を(卷)き(怪)力(を)り(と)與(言)ふ(小)格(左)衛(門)に(益)主(水)を(恨)む(心)の(増)長(何)と(ぞ)荒(河)を(亡)者

不(せん)と(工)夫(を)一(其)頃(町)奴(と)唱(ふ)る(益)者(不)語(ら)ひ(押)片(付)ん(と)仕(組)一(友)友(主)水(の)為(不)切(殺)を(柵)に(目)論(見)画(餅)不(さ)り(よ)り(茲)に(象)川(舍)人(の)寄(親)あ(も)を(以)て(内)縁(の)如(く)交(り)が(尚)我(娘)の(菊)と(呼)れ(る)も(主)水(が)一(子)城(之)助(の)妻(を)お(く)り(て)両(家)益(榮)之(人)々(主)水(を)神(の)如(く)敬(み)弥(如)く(思)ひ(テ)此(上)上(願)ひ(彼)と(有)無(の)勝)負(を)決(し)若(也)後(れ)を(取)る(時)ハ(暗)殺(し)て(腹)を(い)せ(ん)と(此)義(を)懇(願)ふ(つ)も(義)清(殊)不(武)勇(を)好(め)バ(許)容(何)り(て)主(水)不(も)其(旨)を(命)せ(られ)れ(バ)主(水)ハ(殊)々(好)ま(れ)れ(も)君(命)も(た)難(く)て(お)ん(受)せ(り)早(く)も(其)日(不)お(り)れ(バ)大(書)院(の)廣(庭)を(設)の(席)と(し)進(退)の(柏)子(木)ハ(軍)學(者)松(原)將(監)を(司)り(兩)人(則)場(不)臨(む)時(松)原(柏)子(木)を(鳴)せ(三)宅(ハ)相(不)構



不(せん)と(工)夫(を)一(其)頃(町)奴(と)唱(ふ)る(益)者(不)語(ら)ひ(押)片(付)ん(と)仕(組)一(友)友(主)水(の)為(不)切(殺)を(柵)に(目)論(見)画(餅)不(さ)り(よ)り(茲)に(象)川(舍)人(の)寄(親)あ(も)を(以)て(内)縁(の)如(く)交(り)が(尚)我(娘)の(菊)と(呼)れ(る)も(主)水(が)一(子)城(之)助(の)妻(を)お(く)り(て)両(家)益(榮)之(人)々(主)水(を)神(の)如(く)敬(み)弥(如)く(思)ひ(テ)此(上)上(願)ひ(彼)と(有)無(の)勝)負(を)決(し)若(也)後(れ)を(取)る(時)ハ(暗)殺(し)て(腹)を(い)せ(ん)と(此)義(を)懇(願)ふ(つ)も(義)清(殊)不(武)勇(を)好(め)バ(許)容(何)り(て)主(水)不(も)其(旨)を(命)せ(られ)れ(バ)主(水)ハ(殊)々(好)ま(れ)れ(も)君(命)も(た)難(く)て(お)ん(受)せ(り)早(く)も(其)日(不)お(り)れ(バ)大(書)院(の)廣(庭)を(設)の(席)と(し)進(退)の(柏)子(木)ハ(軍)學(者)松(原)將(監)を(司)り(兩)人(則)場(不)臨(む)時(松)原(柏)子(木)を(鳴)せ(三)宅(ハ)相(不)構

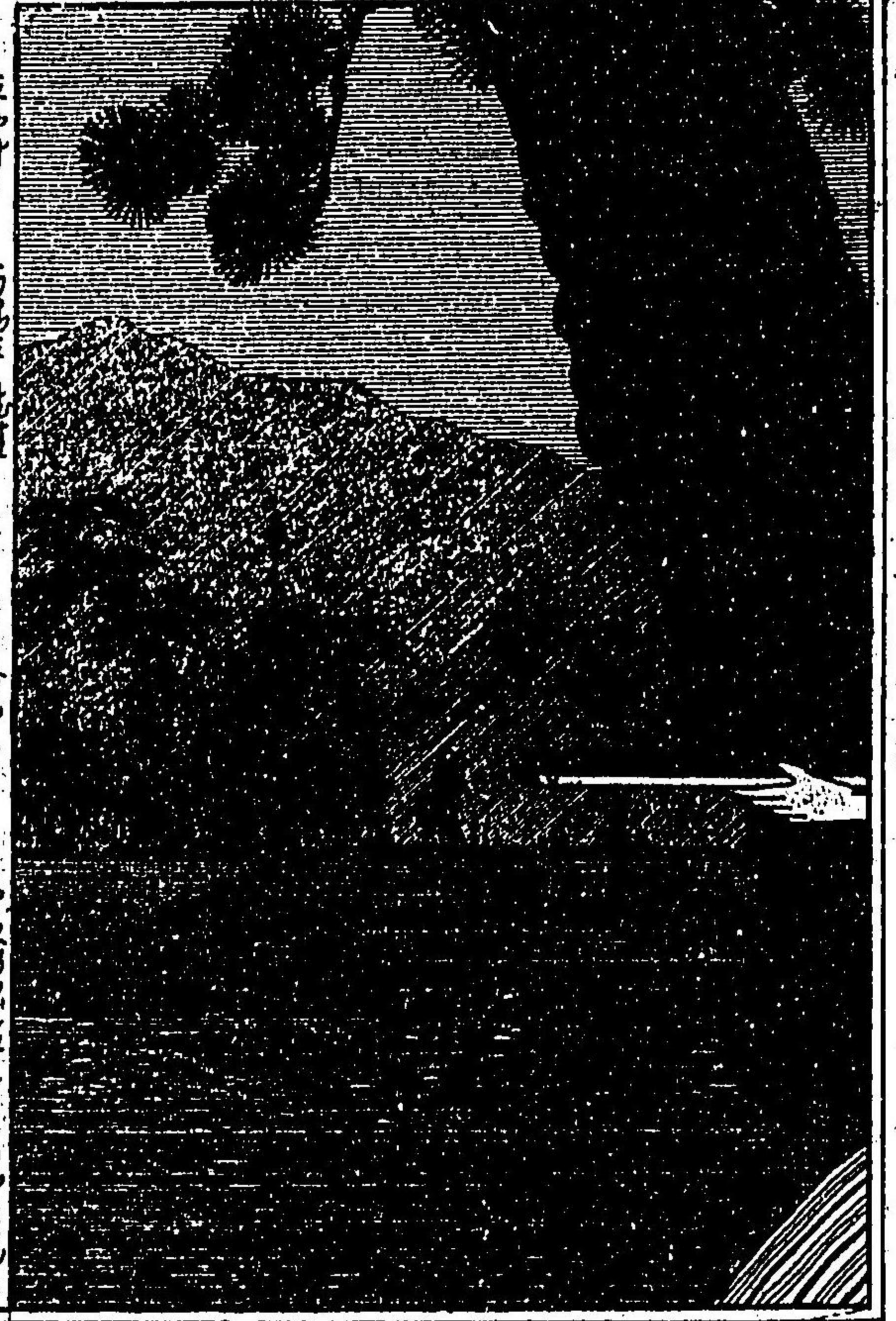


荒河(青眼)が来て、毫毛のすきまも三宅(稍)暫くためらひ、大(叫)んで打込(切)先(主水)を受留(又)互(白)眼(合)ひとがり、何(り)て主水(其)太(刀)をまきほぐし、一(間)計(飛)上(り)稻(妻)の(ひら)ゆ(如)く打込(お)を(格)左(衛)門(受)留(人)とを(れ)も(も)眼(ち)ら(つ)き(思)ひ(を)后(の)方(一)退(く)を(付)合(て)荒(河)ハ(一)刀(の)隙(も)又(も)腰(支)を(う)ち(懲)一(見)え(た)る(と)聲(を)か(け)て(も)耳(も)入(せ)死(者)狂(ひ)不(可)死(廻)る(を)ぬ(け)つ(潜)く(つ)は(か)ら(か)り(志)ま(を)宙(不)打(落)き(三)宅(へ)君(前)を(も)俾(け)ら(を)大(手)を(廣)げ(親)を(も)も(と)將(監)拍(子)木(を)打(て)留(れ)共(止)ら(ぬ)荒(河)を(拾)上(り)と(組)付(たり)主(水)鼓(耳)を(掛)拍(子)木(鳴)を(静)ま(り)玉(と)云(い)と



三宅(稍)暫(く)ため(ら)ひ(一)大(叫)んで(打)込(切)先(主水)を(ま)き(ほ)ぐ(し)一(間)計(飛)上(り)稻(妻)の(ひら)ゆ(如)く(打)込(お)を(格)左(衛)門(受)留(人)とを(れ)も(も)眼(ち)ら(つ)き(思)ひ(を)后(の)方(一)退(く)を(付)合(て)荒(河)ハ(一)刀(の)隙(も)又(も)腰(支)を(う)ち(懲)一(見)え(た)る(と)聲(を)か(け)て(も)耳(も)入(せ)死(者)狂(ひ)不(可)死(廻)る(を)ぬ(け)つ(潜)く(つ)は(か)ら(か)り(志)ま(を)宙(不)打(落)き(三)宅(へ)君(前)を(も)俾(け)ら(を)大(手)を(廣)げ(親)を(も)も(と)將(監)拍(子)木(を)打(て)留(れ)共(止)ら(ぬ)荒(河)を(拾)上(り)と(組)付(たり)主(水)鼓(耳)を(掛)拍(子)木(鳴)を(静)ま(り)玉(と)云(い)と

聞(こ)へ(も)何(ね)大(人)氣(ふ)と(嘲)笑(ひ)て(三)宅(が)帯(手)を(掛)て(左)の(方)へ(投)出(し)一(礼)を(坐)不(返)る(見)物(の)喝(采)泰(山)も(崩)れ(や)う(不)聞(たり)三(宅)へ(辛)々(起)上(る)額(腫)上(り)脚(腰)痛(みて)着(坐)も(お)つ(か)け(れ)と(術)ま(く)殿(の)方(向)て(平)伏(を)顔(色)紅(の)如(く)無(念)の(涙)血(走)たり(義)清(朝)臣(兩)人(が)手(並)甲(乙)格(別)の(違)ふ(れ)此(上)槍(も)負(た)らん(三)宅(す)怨(を)結(ぶ)ら(ん)と(思)ひ(玉)ふ(故)天(晴)ふ(り)兩(人)の(藝)術(格)左(衛)門(負)たり(と)て(耻)ま(思)ひ(を)水(魚)の(思)ひ(を)交(す)一(槍)ま(く)重(て)見(る)一(今)日(ハ)休(息)致(せ)よ(と)云(捨)て(本)丸(飯)を(主)水(格)左(衛)門(不)按(拶)を(只)目(礼)の(一)て(ぞ)別(れ)り(一)家(中)の(者)荒(河)を(ほ)め(三)宅(を)誹(る)者(日)頃(十)倍(一)て(專)此(事)を(云)馳(げ)三(宅)ハ(兩)目(を)失





ひ病氣は稱して引籠れり荒河が首尾一段めて内々吉光の刀を拜領し此度隣國廣岡の城主赤松氏  
小婚禮の有りし祝儀の使者として主水を遣はし支度金をも賜ひ行列立派に出立べしとありよつて  
千五百石の格式にて近き不發迄もると聞き格左衛門の堪らざる其門人薦河維石郷田等がその  
時を過ぎぬ途中不於て討果一玉と薦かる小我も己不其意決せりと密に家財を賣却し路用  
金とよて腰不付暗討の支度をよ  
まふ荒河ハ斯とも知む同月二十三日  
暁に主水の拜領の小袖下不淡黄無  
垢黒羅紗の馬乗羽織花色緞子の  
野袴太刀拵の刀ぬり鞭取て鹿毛  
の駒ふひらりと乗り家族門弟數  
多の人を送られ城中を出で松林の  
出口にて別れ徐々とうち出たりこの



時東ハ白めども辺小間き松の蔭格  
左衛門弓手よる小山の木間みかく  
ろひ兼て準備の種が島裏金の陣  
笠の折々きらめくを覗ひまま一切  
発てハ隣むべし荒河主水ハ右のこき  
腹より左打ぬれ馬より下真逆  
四十九戈を一期としてさし義勇の  
俊傑奸曲狗革の為不暮秋の露と  
消失たるはまことまもともくろく  
徒者共ハひくくその辺を探せとも格左衛門ハ抜道より早く  
逐電一たりたれ誰が所為ぞ知るよふく先屋敷不飯主斯と告るふ舍人門人共のすく城の助  
かり駈来り怒り歎け何の験も何らされば此由重役一届出るふ義清朝臣も驚き歎け水檢死ハ菊  
池秋之進舍人立會改め見て兼て聞く三宅格左衛門意趣を舍む由聞えりく此疵口三角ふ



時東ハ白めども辺小間き松の蔭格  
左衛門弓手よる小山の木間みかく  
ろひ兼て準備の種が島裏金の陣  
笠の折々きらめくを覗ひまま一切  
発てハ隣むべし荒河主水ハ右のこき  
腹より左打ぬれ馬より下真逆  
四十九戈を一期としてさし義勇の  
俊傑奸曲狗革の為不暮秋の露と  
消失たるはまことまもともくろく  
徒者共ハひくくその辺を探せとも格左衛門ハ抜道より早く  
逐電一たりたれ誰が所為ぞ知るよふく先屋敷不飯主斯と告るふ舍人門人共のすく城の助  
かり駈来り怒り歎け何の験も何らされば此由重役一届出るふ義清朝臣も驚き歎け水檢死ハ菊  
池秋之進舍人立會改め見て兼て聞く三宅格左衛門意趣を舍む由聞えりく此疵口三角ふ



破れたる三角弾を用ひあり此弾を用ゆる三宅の外ふるまト叔ハ彼奴ガ所為あらんと云ふ  
義清ハ聞てさも何んそ夫より城之助ハ多勢をそへて三宅ガ邸を取囲せり家財一ツも  
なき空家とよりたれハ弥倍左衛門ガ所為と云ト明白より依て城之助ハ父の葬禮定式の  
忌服申付られ五十日の忌何けて後家續相違ふ下り此もガ城の助生得多病と幼年よ  
り武術ハ熟練且心猛く勇ましく  
志も孝心深クハ俱天を戴かとき  
父の仇をさし置き一日も安逸は暮  
まハ不孝の弟一より願書を奉り  
て仇討の免許を乞はれハ義清朝  
臣歎賞りて定宗の刀と路金百  
兩ハ証文取添賜りり首尾残  
る所ふく君恩を謝し留守を象川



破れたる三角弾を用ひあり此弾を用ゆる三宅の外ふるまト叔ハ彼奴ガ所為あらんと云ふ  
義清ハ聞てさも何んそ夫より城之助ハ多勢をそへて三宅ガ邸を取囲せり家財一ツも  
なき空家とよりたれハ弥倍左衛門ガ所為と云ト明白より依て城之助ハ父の葬禮定式の  
忌服申付られ五十日の忌何けて後家續相違ふ下り此もガ城の助生得多病と幼年よ  
り武術ハ熟練且心猛く勇ましく  
志も孝心深クハ俱天を戴かとき  
父の仇をさし置き一日も安逸は暮  
まハ不孝の弟一より願書を奉り  
て仇討の免許を乞はれハ義清朝  
臣歎賞りて定宗の刀と路金百  
兩ハ証文取添賜りり首尾残  
る所ふく君恩を謝し留守を象川

舍人ハ委ね母と女房菊のこととたのみ  
別れの涙ハ旅合羽の袖に沾しぬ茲草  
履取岡平と三下郎且那さまの御恩を  
受し御恩報しこともせしとあはれハ  
何卒若旦那の御供ふ召運られ下ま  
るべし實意を願ひ願ひなる西京  
者あはれども元常陸の産みて武士の兒  
あはれは連主水が世に在り日も眼を掛て  
使ひ者故主の敵ヲ尋ねたいと思ふも道理あはれごと城の助ハ供連れ九州ハ三宅ガ生國あはれ却て彼  
地ハ飯室より五畿内より北國を廻り而して鎌倉小村人播磨より浪花ハ出で普令市中を探り  
○悠て三宅塔左衛門ハ意趣を累ね荒河主水と思ひの次ハ暗討に積る怨を晴せし愉快と  
限あはれ山名家より我を突撃せると嚴重めらんと察され當分の深山幽谷ハ忍て出せ鳥獸を





撃ち是を食一餓を凌ぎあり一ッ后丹波の山中小幸り狩人のもと余たる猪狼ふん撃取を狩人等小興一ッ村長五郎太夫といふ三宅の砲術の長たるを敬尊懇小懇良應をもて此家小足を停め且路用も多一ッかね貧窮の者を恵み表を慈善者の体不見せり又壮年の者小相撲劍術ふんど教導られた村の者小尊重せられ上見ぬ鶴鳥も暮一ッるが近郷大木村の庄家得兵衛山里小似り富有の者も其子得太郎も門弟小あり劍術を幸びる故三宅も此家小来ると屢あり然るも得兵衛の后妻お重といふ年の頃廿七計かて都産の手脚女あれば一ッッ落左衛門に彼が色香小春心を動一ッまある女小知らる間が透かな口説といふも程よきいらもなごり一ッと或日得兵衛父子



いらもなごり一ッと或日得兵衛父子

更あり下女下男小至る迄山田の晩自取の忙さ小威外小出て内小居り小お重小固より農業を嫌ひ髪化粧を極め今日も一人宿小残て物の水小と讀居るを落左衛門に幸と忍び入て口説一ッ例の如く聞流一ッ靡く意の何一ッされども是迄あり是非も一ッと逃んとあせるお重を捕一ッ手拭取て口に



えませ美帯細帯取出一ッ手脚を堅く縛り上げ裏手の谷間小繫きおき又立候て得兵衛が貯金を盗取りお重を肩小引掛て夜道を厭い小走りつ同国高原山の谷陰まで思の伏小強奸者其依助おきあひ後の障ふありもせんと縊殺一ッ了藁中へ死骸を投捨て跡をも見小越前の方へ走去り実小落左衛門の残忍邪曲悪むも尚余何り蓋お重も夫の勞を助け小て只小容色を飾る



のみを事とし人其美を誇りより還て此奇禍ふは是將自招ぎ一醉を謂つべし茲は元河城の助  
 一條山に至り此風説を傳へ聞き夫こそ三宅格左衛門不違ひあつるべし思ふ不付て此處来りてこの  
 遅きを歎きぬ夫より又京都より三條大橋の辺ある紀伊國屋へ旅籠屋不宿り日毎不洛中洛外  
 を見物ふとせ残る限なく探せども夫をと思ふ手掛もあらず是より浪花不赴き又一探偵して  
 見せやと伏見不出て夜舟不投り翌朝大坂不下り天満橋の辺に宿を需め晝道頓堀の芝居より  
 夜に新町北の新地と人の集る處とに隈なく索す其中頃六月の炎天不て終日表不有る  
 をもて遂に城の助の邪氣不觸れ霍乱不あやみり其容体一變して瘧疾不ありより一月  
 餘りもあやみりし一休の弱り不餘病を發し今手重く見えり良医を聘し療養不は  
 只管疎ういふけれど城の助の序次不氣力衰下り所詮今度我とわが助かると思ふ  
 みぞ或日岡平を枕邊近く呼び寄せて我父の仇を報せよと終に病不死ふこと遺憾こ  
 のうへあけれど斯あり果てせん術あり依て汝不遺言をる我此地不果たれ故郷よか  
 へり弟大秀佛門不入り一旦出家して他國不有れども彼不還俗をたさめて父の敵と討

せ玉と母上おまをしくれよといふに岡平さんい開け仰せよといふも氣の弱きことのため  
 今不御全快有るべしと種々慰め岡平が介抱あるかあけれど数日たちても全快の驗の見えぬ  
 を是非もあらず然るに下部岡平へ長逗留の徒然ふまふかして島の内の遊女の許に通ひ度累  
 りて揚代の今へ負債ふさしつう下碇の心の淺まると忠義の道も忘却あり主人の病の重  
 きを幸路用の金を掠め取り負債を拂ひ花やある遊ひを一度催さんと悪心忽地  
 光せしう其夜城の助が寢息を窺ひ枕元ある路用の金を掻いさらひつて逃んとせしが心  
 をあてて傍の食盆を蹴ちりしければ城の助の目を覺し岡平何をせよと咎められ  
 てまぎれ狼狽言譯してもこと済むべきをともかたつぬ所を度胸をきる毒を食ひ  
 血までと城の助が上にまたがり手拭とつて首不巻き付け力みまかせて引締る不瘦さらう  
 一城の助ゆるぎこれを避んとせざることを能く然るに口不障りたる岡平が小指の先を嚙切  
 りたりしが際期にて吁と云つそり返りもろくも息絶果たり憊て岡平の指の痛さも  
 ことごとくせざる有合ふ路金衣類さらあり大小を奪ひ取り庭の板塀乗りこえていづ



地ともふく馳去りけりさて翌朝ふ至り宿の主人へ此有りさまふうち驚き取敢て旅客を  
 死の趣を其司ふ訴へるべし則ち檢死出張を死骸を篤とあらたむるふ口中指のさまを  
 舎めりまゝ復讐免許の証状ふ旅日記さへ有りて判然たれば岡平逮捕の準備あり又城の助の  
 害せし下部岡平ある事まで是ふあいて判然たれば岡平逮捕の準備あり又城の助の  
 遺骸へ同所所ある作州山名の蔵邸の留守居を呼び引渡されけき即日下寺町照  
 念寺に埋葬あり前髪と書類へ作州高田ありける妻の許へ飛脚をもつて送られ  
 るふ夫と聞くより母のお菅妻のお菊が愁傷へ何み比較へんせうもふく悲歎の涙を暮  
 れたりし理せめて哀れあり

寶鏡文庫 新河正貞傳卷上

定價金五錢

NO.2 明治十七年十月廿一日御届  
 同 十八年三月 出版

編輯者 春陽堂 和 田篤太郎  
 出版者 春陽堂 和 田篤太郎  
 京橋區南傳馬町 一丁目十四番地

岩倉誠忠義傳	全一冊	定價金十七錢	尼子十勇士傳	全三冊	定價金六十錢
具視公誠忠義傳	全二冊	定價二十八錢	太平大坂軍記	全五冊	定價一圓十五錢
章人系竹の葉	全一冊	定價金四十錢	實錄 伊賀上野響の仇討	全二冊	定價金三十錢
秘訣系竹の葉	全二冊	定價金五十錢	實錄 鼠小僧白浪草紙	全四冊	定價金六十錢
○狂詩文幼學便覽	全一冊	定價金三十錢	實錄 四谷怪談	全一冊	定價金三十錢
義太夫生寫朝顔日記	同	金三十錢	實錄 佐賀怪猫奇談	全二冊	定價金三十錢
義太夫菅原傳授手習鑑	同	金三十錢	實錄 白石斷孝女の仇討	全二冊	定價金三十錢
義太夫平がな盛衰記	同	金三十錢	實錄 西國順禮烈女の仇討	全二冊	定價金三十錢
丸太夫繪本太功記	同	金三十錢	實錄 松前屋五郎兵衛一代記	全二冊	定價金三十錢
丸太夫關取二代鑑	全一冊	定價金十五錢	實錄 夢物兵衛胡蝶物語	全一冊	定價金一圓
秋津島關取二代鑑	全一冊	定價金十五錢			
武田信玄甲越烈戰軍記	全一冊	定價金三圓			
上杉謙信	全一冊	定價金三圓			







特42

986

庫録  
荒河武勇傳

上卷



205014-001-7

特42-986

荒河武勇伝

春風亭 香雨/編

上

M18

EDV-0005

